翔

はばたけ

発行者
秋田県横手市根岸町２－14
秋田県立横手城南高等学校
図書委員会

印刷　㈱アイ・クリエイト

夢について

校長　高橋　透

小野小町の歌、「うたたねに恋しき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき」（『古今和歌集』）から窺えるのは、夢は「見る」ものであり、「当てにならないはかないもの」だとする考え方です。しかし、今では、夢を持つこと、夢の実現に向けて努力することが推奨されているように思います。このように夢の見方が変化したのは、一体どうしてなのか、疑問に感じることがありました。

ある時、その疑問に対する答えが偶然耳に飛び込んできました。

「C'mon, baby アメリカ　ドリームの見方を Inspired」（DA PUMP『U.S.A』日本語詞 shungo.）、「American Dream」の「Dream」からの「Inspired」だったのだなと得心しました。軽快なテンポの楽しい曲に、聞き逃してはいけない手強い歌詞が乗せられていました。

さらに、もう一か所、気になって仕方がないところがあります。

「C'mon, baby アメリカ　どっちかの夜は昼間」

ここで思い出すのは、中国の古典である『列子』の次のような話です。

尹氏というお大尽が、たくさんの下僕を早朝から夜まで厳しい労働に従事させ、事業をしています。ある人が人の下僕にその苦労をいたわる言葉をかけると、このように答えます。「人生百年、昼夜各々分す。吾昼は僕虜たり、苦は則ち苦なり。夜は人君たり、其の楽しみは比無し。何の怨む所あらんや」。夜に見る夢の中では人君として楽しみを極めているから、それで十分なのだというのです。一方、多くの下僕を労役に従事させている尹氏はというと、毎夜、下僕となって鞭打たれる悪夢に苦しんでいる、とこのような話です（『新釈漢文大系』）。

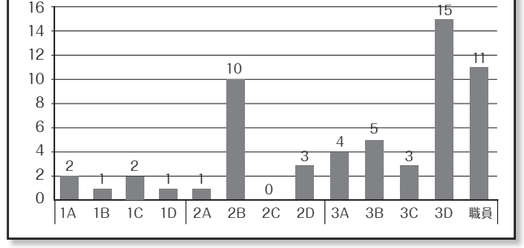
さて、人生の半分が夢の中である（昼夜各々分す・どっちかの夜は昼間）とすると、私のいる今・ここは、いったいどちら側なのでしょうか。ほっぺたをつねってみて痛ければ現実だ、と言われるかもしれません。しかし、かのデカルトによれば、「われわれが起きているときに経験される、この思考（表象）とまったく同じものが、眠っているときにも体験できる」（『方法序説』）のですから、その痛いという感覚は本当なのでしょうか。実のところ、「わたしたちのすべての認識は経験とともに始まる」（カント『純粋理性批判』）のであり、夢か現実かを区別することは、原理上、不可能だと思われます。では、夢の中にいる時、私の存在はゆめまぼろしのようにはかないものなのでしょうか。いや、そうではなく、夢の中にいたとしても、私の存在は揺らぎません。デカルトが「我思うゆえに我あり」と言っているように、また、『列子』にも示されていたように、夢であれ現実であれ、私が何かを思い感じていること、それこそは、「絶対の真実」なのであります。

貸出の現状

今年度の横手城南高校図書館の貸出総数は六五一冊（十二月三十一日現在）でした。昨年度は七三五冊（令和四年四月一日から十二月三十一日までの統計）でしたので、昨年度よりも貸出総数は減りました。

各学年における、図書館で本を借りている冊数を比較してみると、一年生が合計七冊、二年生が合計五十四冊、三年生が合計百九十三冊となり、三年生の図書館利用が多いことが分かりました。また、教職員は合計七十五冊借りている状況で、学校全体で図書館を利用していることがデータから読み取れます。また、本校の皆さんがどのジャンルの本を多く借りているのか、データを見てみると、文学が三〇二冊と一番多く、次いで社会科学が二四冊、自然科学が七十一冊という結果でした。やはり、小説が人気であるようで、この傾向は例年変わらないようです。

実は、本校図書館に置かれている本のジャンルを見てみると、「哲学」や「技術・工学」、「芸術・美術」など、幅広いジャンルの本があることを発見しました。なかなか時間がとれず、忙しい日々を過ごしている高校生の皆さんだとは思いますが、ぜひ本校の図書館に足を運んでみてください。新たな本との出会いがあるかもしれません。また、本校には学校司書の方もいらっしゃるので、分からないことがあれば教えていただけると思います。



多読者インタビュー

◎三年Ｂ組　泉谷　歩花さん（25冊）

Q 好きな本を教えてください。

A 今村昌弘さんの『兇人邸の殺人』です。「○○の殺人」シリーズの三作目です。普通のミステリとは違って奇想と本格ミステリが融合されているので、話の展開がとても面白いです。

Q 好きな作家を教えてください。

A 住野よるさんと友麻碧さんです。住野よるさんは『か「」く「」し「」ご「」と』という本が好きです。友麻碧さんは、『かくりよの宿飯』シリーズが好きです。

Q 今後読んでみたい本はありますか。

A 『すずめの戸締まり』です。映画を一度観たのですが、映像で観たときは作画が良く、とても引き込まれる内容だったので、本も読んでみたいと思ったからです。

◎三年Ａ組　粟津　優愛さん（21冊）

Q 好きな本を教えてください。

A 重松清さんの『きみの友だち』という本です。足の不自由な恵美と病気がちな由香はクラスの誰とも付き合いません。なぜなら、二人の持つコンプレックスを誰も受けとめようとしないからです。二人はけんかしつつも、ずっと一緒にいて、腐れ縁のような関係だとしても絶対離れない二人に惹かれてこの作品を選びました。

Q 好きな作家を教えてください。

A 雅姫さんです。部屋の模様替えに興味があって、彼女の本を読んでみました。生活で使えるアイディアを知ることができます。

Q 今後読んでみたい本はありますか。

A 雅姫さんの本を熟読したいと思っています。お弁当の作り方など、暮らしのことについて書いているので、生活をする上でのアイディアを豊かにしてくれると思います。

令和四年度　図書委員会活動報告

移動図書館

私たちの通う横手城南高校の各フロアには移動図書館と呼ばれる展示があります。学年問わず自由に借りることができ、立ち読みでの利用も可能です。また、小論文関連の本や探究のテーマに沿ったもの、メディア化した作品など多様なラインナップでの展示を行っています。生徒だけでなく先生方の利用も多く、興味深い蔵書の数々に新たな知見を得られること間違いなしです。これまで移動図書館を愛用してくれていた方も利用したことのない方もぜひ移動図書館をご利用ください。

図書館便り

図書館便りは、城南生の読書や本への興味関心を高めてもらおうと、月一回の発行を目指し取り組んできました。毎月様々なテーマで図書館便りを作成し、目に留まるテーマを精選し、読書のきっかけになるような編集に努めてきました。その中でも、定番記事である「新任の先生方へのインタビュー」では、先生方の読書に対する熱い思いを伺うことができ、大変好評でした。今後も、城南生の読書や本への興味関心を引き出せるような編集に努めたいと思います。

城南祭展示

今年度の城南祭で図書委員会は、前年度に引き続き「しおりコンテスト」、「絵本」の展示を行いました。しおりコンテストは、全学年、全職員を対象に募集し、合計24枚のエントリーがありました。力作揃いのエントリー作品から、３Ａの髙橋凜心さんのしおりが最優秀作品に選ばれました。モチーフである椿の花には「気取らない優美さ」という花言葉があり、まさにこのしおりはシンプルながらも美しさを感じる作品であったと思います。絵本の展示では、子ども向けの大型絵本、仕掛け絵本を中心に展示をしました。その際、図書委員がそれぞれの本のＰＯＰを作成し、共に展示することをしました。

今年度は、コロナ禍後、初の来場者を迎えての城南祭となりましたが、来場者の方にとっても読書を身近に感じてもらえたのではないかと考えます。

おススメの新刊本

皆さんから寄せられた購入希望をもとに、今年度も多数の新刊を配置しました。皆さんの読書時間が豊かになるようにと、新刊の中から二年生図書委員がお薦めの図書を選びました。読書の参考にしてください。

『ティンカー・ベル殺し』　小林　泰三　著

「不思議の国」で暮らす蜥蜴のビルになった夢を見る大学院生の井森は小学校時代の同級生らによって催される同窓会に赴く。その同窓会で、夢ではビルが迷い込んだ「ネヴァーランド」でティンカー・ベルが殺害され、現実では同級生の一人が不可解な死を遂げる。「メルヘン殺しシリーズ」第４作。巻末では著者の元担当者が、もう二度と本人に聞くことはできないであろうシリーズの構想について赤裸々に語る。犯人発見の鍵は「先入観から脱獄すること」

『ＡＩとカラー化した写真でよみがえる戦前・戦争』（「記憶の解凍」プロジェクト）　庭田杏珠×渡邉英徳　著

「戦争があったことを忘れてはいけません。」よくこのようにいわれます。実感がわかない人も多いと思います。この本ではカラーに慣れた私達にとって「凍りついた」ように感じる白黒写真をＡＩとヒトのコラボレーションでカラー化し「記憶の解凍」をしました。再び「流れ」始めた人々の物語を写真と一緒に眺めてみてはいかがでしょう？

『コウノドリ　新型コロナウイルス編』　鈴ノ木　ユウ　著

「抱きしめたくても、触れられない」

面会の時間制限、立ち会い出産の不可、コロナ禍の出産は今までの常識を覆すものでした。

二〇二〇年、社会そして日常生活を一変させた未知のウイルスは、新しい命が誕生する現場にも不安と苦しみを及ぼしました。感染症という目には見えない恐怖と戦いながら、産科医サクラとその仲間たちは出産に向き合います。命の尊さ、そして当たり前の幸せさを改めて実感する作品です。

『知らずに他人を傷つける人たち』　香山　リカ　著

新種のハラスメントがやってきた。職場や家庭でのいじめや嫌がらせを表す言葉として新たに登場したのがモラハラだ。言葉や態度で相手を傷つける事によって、相手を支配し、被害者は気付かないうちに、「悪いのは自分」という意識になる。職場においてのモラハラは、社員のメンタルに悪影響を及ぼし、企業の生産性が低下する。モラハラは病気なのか。なくすにはどうするべきか。この本はそのことについて様々な視点から考えさせてくれる。

編集後記

読書の楽しみ方は人それぞれです。媒体が紙でも電子でも、一冊をじっくり読むことも、あちこちに手を付けて読むことも、積読（つんどく）もいずれ読むのなら良いかもしれません。

二面では昨年に続き、小松田先生がご自身の読書観を記してくださいました。「積読」の苦痛や文章の「硬さ」で分ける読み方など、「本を読むことをやめることができない」という思いに至るまでの貴重なお話を寄せていただきました。書店に足を運びたい気持ちが募ります。

三面では「ジェンダー問題」をテーマに、アンケートとＮＩＥから全校生徒で考えました。社会問題の入り口として、関連図書への興味関心に繋げてほしいと思います。

今年度は探究活動や大学進学の資料としての図書の利用が多くなりました。城南高校図書部では、楽しみも学びも取り揃えて、皆さんをお持ちしています。

しおりコンテスト応募作品

私の読書観

大学生になっても文学書、いわゆる小説を読んでいたが、次第に小説を読む量が減り、自然科学に関する書物を読む時間が増えていった。教員になりたての頃もその傾向は続いていたが、二十年ほど前のある書物との出会いが、私の読書傾向を大きく変えた。その本はC・P・スノーの「二つの文化と科学革命」である。著者が一九五九年にリードで行った講演で、その内容は西欧ことにイギリスにおける科学的文化と人文的文化の隔絶と対立が文化そのものはもとより、正常な社会の進歩までをも阻害しているとして、伝統的な教育制度の抜本的改革を断行すべきことを提言したものであった。この本との出会いで、人文系の書物と科学技術系の書物をバランスよく読むことの大切さを教えられた気がする。

教員になってからしばらくの間は読みたい本を購入しても、なかなかよむ時間がつくれず、ただ部屋の隅に積んでおくだけだった。これらの本を眺めるのは苦痛だった。読書の時間が増えるきっかけになったのは、赴任先のとある学校で行っていた朝読書であった。授業が始まる前のわずかな時間であったが、生徒と一緒に各自読みたい本を読むというのは楽しい時間であった。十五年ほど前のことであるが、この頃から読書の時間が少しずつ増えたように思う。

私はいろいろな分野の本がそろっている大きな本屋で本を探す時間が大好きである。本屋の関係書が並んでいる所で、片端から本を開いて見る。まえ書き、あと書き、訳書の場合には、訳者あと書きを読み、奥付を見てどれだけ版を重ねているかを確認する。多くの版を重ねていれば、それだけ読まれていることだから、間違いない本だろうと予想できる。最後に参考文献がしっかりしているかを確認する。このようにして読みたい本を同じ分野から二、三冊選び購入する。分野の異なる本も購入するので、多いときには四、五冊購入することになる。購入したらひたすら読む。ひたすら読むといっても、一冊の本だけに集中して読むことは私にはできない。元来、飽きっぽい性格のためか、一冊の本だけに集中していると疲れてきて、気分転換に別の本を読みたくなるので、初めから少なくとも二分野の本を準備しておく。一つは「かたい」本で読むときに集中力を要するもの。もう一つはいくらか「やわらかい」本で少々気楽に読めるものである。これらを組み合わせて読書を進める。読みながらメモやノートを取ったりはしない。読み終えて、その分野に興味を感じたら、参考文献を参考に次の一冊を選ぶという具合である。最近はいろいろな分野の本をそろえている大きな本屋が少なくなってきているので、本屋に足を運んで本を選ぶことはほとんどない。本屋で実際に本を手に取って見て、時間をかけて選ぶことが少なくなっていることは非常に残念である。私は数学科の教員なので自然科学書に関しては、どの本を購入するかはあまり悩まない。それ以外の分野、哲学・思想、心理学、精神医学、社会科学、医学、環境問題、メディア論、歴史、芸術に関しては、どの本を購入するかは悩む。その際、各出版社が毎年作成している図書目録と読み終えた本の参考文献を頼りに本を選んでいる。

何故、読書をするのか、どうして本を読むのか、それに対する答えは人によって異なるだろう。各学問分野の専門化が進み、その境界が不鮮明である現在、各分野の歴史、学説史、思想史をたどり、各分野で現在何が行われているのか知りたい、あるという雰囲気だけでも味わいたいという欲求が、私が本を読む理由だと思う。「知りたい」と思って、本を読んでいるのだから、著者の思想を正確に理解したいのであるが、一冊読み終えてもなるほどと納得できる一文に出会えれば良い方で、読めば読むほど分からないことが出てくる。このような次第で私は本を読むことをやめることができない。

最後に、作家・ジャーナリストである立花隆が記している読書についての十四箇条からいくつか挙げておく。もちろん私も実践している。

（一）一つのテーマについて、一冊の本で満足せず、必ず類書を何冊か求めよ。類書を読んでみてはじめて、その本の長所が明らかになる。

（二）自分の水準に合わないものは、無理して読むな。水準が低すぎるのも、水準が高すぎるのも、読むだけ時間のムダである。

（三）読みさしでやめることを決意した本についても、一応終わりまで、一ページ、一ページ繰ってみよ。意外な発見をすることがある。

（四）速読術を身につけよ。

（五）本を読みながらノートを取るな。ノートを取りながら一冊の本を読む間に、五冊の類書を読むことができる。

（六）注釈を読みとばすな。注釈には、しばしば本文以上の情報が含まれている。

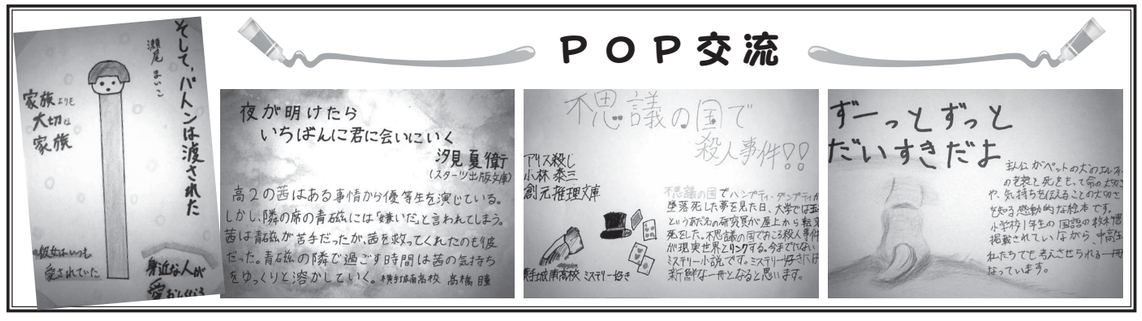
（七）本を読むときには、懐疑心を忘れるな。活字になっていると、何でももっともらしく見えるが、世評が高い本にもウソ、デタラメはいくらもある。

（八）オヤと思う箇所（いい意味でも悪い意味でも）に出会ったら、必ずこの著者はこの情報をいかにして得たか、あるいは、この著者のこの判断の根拠はどこにあるのかと考えてみよ。それがいいかげんである場合には、デタラメの場合が多い。

（九）翻訳は誤訳、悪訳がきわめて多い。翻訳書でよくわからない部分に出会ったら、自分の頭を疑うより、誤訳でないかとまず疑ってみよ。

どうか皆さんも今まで以上に本を手に取って、読んでみませんか。

POP交流



ジェンダーを考える

～「らしさ」とは～

「ジェンダー平等」という言葉を聞いたことがありますか？SDGsの17の目標の中には「5ジェンダー平等を実現しよう」という項目があります。今年度、本校図書館にはジェンダーを含む、地域や社会問題に関する書籍をたくさん配置しましたので、総合的な探究の時間等で触れたことがある人もいると思います。

「ジェンダー」とは、生物学的な性別に対して、社会的・文化的につくられる性別、世の中の男性と女性の役割の違いによって生まれる性別のことです。身近なところでは、「男らしさ」や「女らしさ」という表現で見聞きすることがあったのではないでしょうか。

性差別やジェンダー不平等などのいわゆる「ジェンダー問題」は、そのまま「女性への差別」と同義にされることが多いように思います。日本では、女性は男性に従順であることを求められ、経済的な自立や社会的活躍のチャンスを大幅に制限される、というような部分がクローズアップされているからです。

―やはり、強烈な（選択的夫婦別姓を認める法案の）否定の背後には、戸主である男性が、「家」制度の中心にいてその秩序を守り、「家の女」である妻を支配し、妻は「家」事をこなし、子育てをし、舅や姑をたて、夫に服従するのが伝統的な家族の姿だという了解が息づいています。（『他者を感じる社会学』好井裕明）―

―「母親に偏った子育て」では、性別役割分業と父親の権威が家庭内で再生産されている。（『働く母親と階層化』額賀美紗子・藤田結子）―

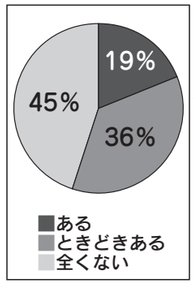
これは今なお続く現実の問題ではありますが、実は、男性も「女性に負けるな」「家族を養えてこそ一人前」・「男は弱音を吐くな」などといった「男らしさ」が求められ、生きづらさを感じている人がいると言われています。

―法律・制度・家族などの中に無数の男性特権があること、それは事実である。にもかかわらず、世の男性たちはあまり幸福に見えないし、自由であるようにも見えない。（『男がつらい！』杉田俊介）―

―いわば称揚される『男らしさ』言説は圧倒的な力をもって『非モテ』男性を縛り付ける。（『「非モテ」からはじめる男性学』西井開）―

そこで、城南高校の生徒のみなさんにも「男らしさ」・「女らしさ」について意見を聞いてみました。

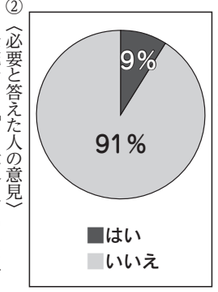
①「男らしさ」・「女らしさ」を意識したことはありますか



①〈どんな時ですか〉

- 言葉遣いや仕草を意識するとき
- 学校の制服や卒業式の座り方
- 家事をする母を見るとき
- 「女の子だから」、「女子力」と言われたとき
- 「男だからできるでしょ」と言われてプレッシャーだったとき
- ケーキバイキングに行ったとき

②「男らしさ」・「女らしさ」の区別は必要だと思いますか



②〈必要と答えた人の意見〉

- 伝統的な「男（女）女らしさ」を無くしたくない
- 「男（女）らしい」と言われたい時もある
- 例えばオリンピックなどの服が男女統されてしまうと、デザインやシルエットの面白さが失われると思う
- 男女に適した仕事や役割があると思う

③〈自由記述〉

- 「差別」は良くないが、温泉やトイレなどの公共施設の使い方は難しい問題だと思う
- 社会にわかる形で、かつ自然な方法で訴えていく必要があると思う
- 女子力の高い男子がいても王子系の女子がいてもいいと思う
- プリキュア好きの男子がいてもいいと思う
- ジェンダーを特別視しない社会になればよいと思う
- 「知る」のではなく「受け入れる」まで理解することが平等への近道だと思う

―スカートを穿くことで「女性らしさ」は達成できるのでしょうか。【中略】性別分業ではなく、生活分業なのです。（『他者を感じる社会学』好井裕明）―

男女の別のみならず、多様性については今後も各方面から様々な評価がされていくと思います。私たちが今できることは、支配的な文化の存在を知り、個人的な好みに偏向することなく、価値を相対化する考え方を身に付けることではないでしょうか。

～NIEでジェンダー～

新聞記事においても「ジェンダー問題」は近年数多く取り上げられています。日本経済新聞では、高校生向け特別版として「誰一人は取り残さない社会」を特集し（2022・10・28）、朝日新聞は「ジェンダー平等宣言」（2020春）を出して、発信内容や社内態勢の見直しを図りながら、Think Gender（シンクジェンダー）という特集の中で多くの記事を掲載しています。3年生には、朝日新聞の記事「私はそれで食っている ミツ・マングローブさんの『不健全論』」（2022・10・7）と、「「性別ないです」が一番しっくりくる井手上漠さん」（2021・8・15）を比較読みした上でジェンダー問題について考えてもらいました。自身の「性自認」と社会における「既成の枠」との狭間で生きる二人ですが、多様性への理解については異なったアプローチをしているようです。

〈二人の相違点は？〉

- ミツ・マングローブさんは多様性の社会を慎重にまだ先のことだと後ろ向きに捉えている。井手上漠さんは、そのような社会が訪れることに対して希望があり、前向きに捉えている。
- ミツ・マングローブさんは「マイノリティー」をおもしろがる世間が変わらないと多様性が認められないと考えているが、井手上漠さんは「マイノリティー」の当事者たちが行動し声を上げ、多数派の人たちが変わることで多様性が認められると考えていると感じた。
- ミツさんはマイノリティーをシンボルとして扱うことに対して否定的で、井手上さんはマイノリティーを利用して声を上げることが多様性において大切だと考えている。
- ミツ・マングローブさんの多様性とは、互いの存在に慣れて無関心になること、井手上さんは、当事者であってもなくてもどちらも不快なく居られる状態だと言っている。
- ミツ・マングローブさんは不健全という言葉を使って、そういう存在に対する好き嫌いが薄れて無関心になっていくことが多様性だと考えている。それに対して井手上漠さんは、個人がそれぞれの性別を持っているということが当たり前になることが多様性だと考えている。

〈二人の共通点は？〉

- どちらも自分らしく生きたいという思いがあり、ジェンダー問題にとらわれないところが共通点だと感じる。
- どちらも、「マイノリティー」であることを特別視しない、されないということが多様性のあるべき姿だと考えているように感じた。また、二人が考える多様性の世間への浸透の担い手として、若い世代に期待していると感じた。

〈あなたの意見〉

- 二人とも自分勝手な意思を通すのではなく、ジェンダー関係なしにより生きやすい社会を目指していて見習いたい。
- 異なるジェンダーを必ず受け入れなければならないと言うことでもないと思うから、どんなジェンダーを持っている人も「世の中には様々な人がいるんだ」と思って生活すればいいと思う。
- 二人のような人たちを全く気にかけずに過ごしていく意味での「無関心」ではなく、気にしなくてもいいほど教育の現場や職場で理解を深めていけばいいと感じた。
- 二人の考え方を知り、自分の気持ちを表現し、自分らしく生きていくために行動を起こしていくことが何より大切だと思った。
- 制服が選択できる学校が現れたように、マイノリティーという少数派の意見でも、それを集めて伝えることで制度を改革でき、またはその規模が全国規模にまで発展させられると分かった。

性別や年齢で「～らしさ」・「～だから」とくくる「無意識の偏見」はどこにでも誰にでも潜んでいます。三年生の意見からは批判的な問題提起に終始することなく、「意識」改革の提案はもちろん、「行動」に移すことへの言及がありました。

―日本はジェンダー（問題）に関して「周知を徹底」なり「思いやり」なりでお茶をにごし、根本的な問題を放置してきたきらいがあります。（『差別は思いやりでは解決しない』神谷悠二）―

『差別は思いやりでは解決しない』（神谷悠二）によると、大学や企業研修のレポートには「思いやりが大切です」という趣旨の感想が多く見られるそうです。狭義ではやりたいことの実現、広義では社会問題への取組において、調査・アピール・企画を通すといった段取りがあります。「思いやり」や「優しさ」だけでは望む状況には到達できない、ということです。動機を形にするためには知見が必要で、さらにスキルをもつことでアウトプットに至るのです。

何かの「動機」をもったら、その分野の知識を深めるために図書館に足を運んでください。情報収集のお手伝いをします。多すぎるネット情報では選べないような、本当に必要な情報を手に入れることができると思います。「ジェンダー平等」について一緒に考えてみませんか。